



診療部動画



## 1. スタッフ

部長（兼教授） 宮本 健史  
 リハビリテーション専任医 3名  
 心大血管リハ専任医 3名  
 理学療法士（以下 PT）17名  
 作業療法士（以下 OT）6名  
 言語聴覚士（以下 ST）4名

## 2. 診療部の特徴、診療内容

リハビリテーション（以下リハと略す）部は、昭和42年に「機能訓練室」として発足し、その後「理学療法部」、さらに平成19年1月に、新中央診療棟への場所移転に伴い「リハビリテーション部」に名称変更された。障害を有する患者様に対して医学的リハの専門知識・技術を用い、自立した生活の獲得を目指している。医学的リハは病院機能の役割分担の観点から急性期リハ、回復期リハ、維持期リハに分けられるが、大学病院・特定機能病院である当院は、主に急性期リハの役割を担っている。令和4年4月現在、当部の疾患別リハでの施設基準は、脳血管疾患等リハI、運動器リハI、呼吸器リハI、心大血管リハI、がんリハ、廃用症候群リハであり、各種別算定には日数に上限が設けられている。

現在はリハ部長と専任医師6名（3名は心大血管リハ専任）、PT16名、OT6名、ST3名の計22名の療法士、看護師2名、クラーク1.5名体制で活動している。

## 3. リハ診療体制

リハ診察は、基本的に火・木・金の午前中であるが、急患の場合は、主治医から直接ご連絡があれば、診察日以外でも対応している。リハ担当医は診療・機能評価の後、担当療法士を決定し、リハ処方箋を作成している。その他、義肢装具の処方は、義肢装具士が在院する診察日の午前中に行っている。身体障害者福祉法の15条指定医による身体障害者意見書・診断書も作成をしている（要予約）。また、リハ効果判定、リハ目標・訓練内容の検討のため、リハ医、看護師、療法士を含む多職種でリハ評価会議を毎週開催している。

リハは月～金までの完全予約制の個別療法（1単位20分）で実施している。担当療法士ならびに予約状況は、CIS上から確認できるようになっている。診察や検査などがリハの実施時間に重なる場合は、リハ実施前に連絡があれば相互の予定に合わせて時間変更が可能である。

手術後や治療による長期のリハ休止後のリハ再開時には、全身状態だけでなく機能障害、活動制限等についての再評価のため、初診時と同様にコンサルトが必要である。MRSA等の感染症に対しても、感染対応時間帯（15:00～）を設けてリハ室でのリハができるだけ行っている。

休日の臥床時間の短縮・ADLの拡大を目指す目的

で、本年度より毎週土曜日リハ、大型連休、年末年始のリハも実施している。

## 4. 診療実績

### ○診療科別単位数の実績※図1

リハ対象疾患は多岐に渡り、全診療科よりリハの受け入れは可能である。リハ室での訓練が困難な患者はベッドサイドでもリハを実施している。

### ○職種別年間単位数の実績※図2

年度目標として、「各療法士1日当たりの単位数」や「年間総単位数」を定めている。令和4年度はCOVID-19の影響もあり、年間目標総単位数87,650に対し、実績は84,139であった。

### ○種別毎(各疾患別)リハ単位数と割合の実績※図3

令和4年度の各疾患別リハの割合は、がんリハ約33%、脳血管リハ約28%、運動器リハ約21%、心大血管リハ約9%、呼吸器リハ約6%、廃用症候群リハ1%未満であった。今後も質・量ともに高いリハの提供を目指した活動を行っていく。

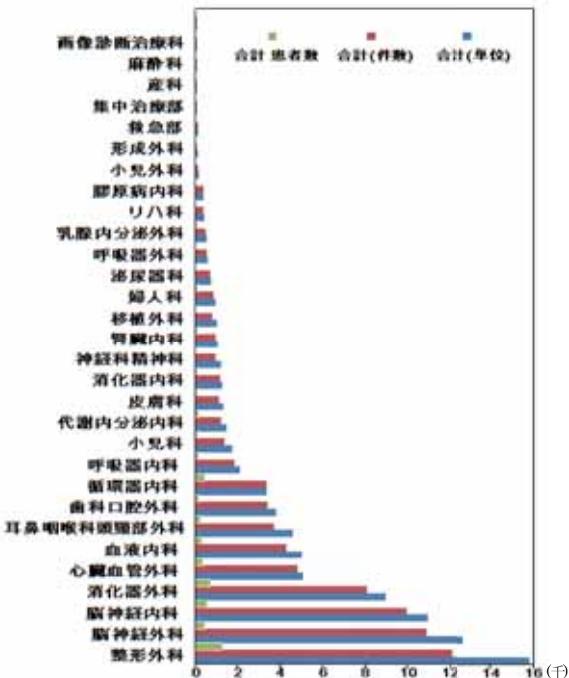


図1. 診療科別単位数



図2. 職種別年間単位数



図3. 種別別単位数

## 5. 地域医療への貢献

当リハ部長が会長を務めている熊本リハビリテーション研究会は、毎回県内外から多くの発表者・参加者を迎える、リハ関連職種の研究発表・意見交換の場となっている。当部は事務局として特別講演の企画、抄録集作成などの運営を行っている。現在までに175回開催し、令和4年度もCOVID-19の感染対策を講じ、開催することが出来た。さらに「心不全患者の運動耐容」や、「難治性てんかん患者に対する外科手術後の就労阻害因子とリハ介入方法の検討」についてなど外部講師として医療人向けに講演を実施し、地域の医療の発展に広く貢献している。

## 6. 医療人教育の取組

当部はリハビリテーション医学会・研修施設の認定を受けており、リハビリテーション科専門医および臨床認定医の資格修得が可能となっている。療法士に関しては専門職の教育の場として、養成校からリハ学生の臨床実習を17名受け入れた。また、熊本大学医学部のポリクリやクリクラの受け入れも行っている。

当部は特に特定機能病院として、他院では経験出来ない稀な疾患や急性期におけるリスク管理などを学習できる場となっている。療法士が担当制をとり実習指導者として教育指導に当たっている。院内活動としては看護師や院内職員を対象に毎年数回のリハビリテーションセミナーを行っているが、令和4年度は、PTによる「糖尿病の運動療法～リハビリテーションの立場から～」を例年通り開催した。また、新人看護師に向けたインシデント予防の観点から、トランസファー研修の依頼があり、COVID-19の感染予防のため、映像教材(動画)の提供を行った。セミナーの内容に関しては希望も受け付けている。

## 7. 研究活動

リハビリテーション部全体のスキルアップのため年度目標を定め、各自研究や学会発表、雑誌投稿等にも取り組んでいる。令和4年度学会発表(演題数)は

日本リハビリテーション医学会九州地方会(1)、日本糖尿病理学療法学会学術大会(1)、日本肝移植学会学術集会(1)、日本心臓リハビリテーション学会九州支部地方会(1)、心臓リハビリテーション学術集会(2)、日本心不全学会学術集会(1)、日本理学療法教育学会学術大会(1)、日本てんかん外科学会(1)であった。そのうち、日本心臓リハビリテーション学会九州支部地方会での発表が優秀演題を受賞した。その他、

『Journal of Modern Rehabilitation: The Index of Exercise Tolerance in Heart Failure with Preserved Ejection Fraction is Gait Speed, not BNP or Cardiac Function』・『Transplantation Proceedings :Psoas Major Skeletal Muscle Mass Is a Predictive Factor for Independent Walking Donor Liver Transplantation』の英語論文が掲載されるなどリハビリテーション専門医、及びセラピストは活動の場を広めている。

3名のセラピストが大学院へ進学をしており、気流閉塞とIMT肥厚との関連性、理学療法学部生の非認知能力と学業成績との関連性について、など多岐にわたる分野にて研究を行っている。

リハビリテーションセミナーの様子



「糖尿病の運動療法」についてのセミナー



例年行っている「トランസファー研修」  
(写真:令和元年度の様子)